

月 日
 「故郷のうた」(第三年第四巻)の執筆打合わせ、
 「わらべ唄」の担当は都丸十九一(員文化院専門委員)・
 山田直次郎(前橋市立女子高教諭)の両氏。唱歌は山
 田直次郎、船津信章(富士見中学校長)・谷内田盛一(元
 県視学)の三氏が執筆。
 「民謡」の部担当予定の横堀真太郎氏からは調査、執筆に
 一年間の視察の申入れがあり、今回は割愛とする。
 「わらべ唄」には都丸、山田の両氏が多年苦心採譜した
 譜を占版に入れ、さらに写真、カットも豊富に使って楽し
 い読め物にする予定。又「唱歌」には上野唱歌、上
 毛の歌を始め農民に永く親まれた懐しのメロディーを網
 羅し、記録するとの事。特に戦前派には特別な感慨のある
 郷土部隊「高崎十五連隊歌」もぜひ入れたいとの意向であ
 る。

原稿の一日も早い到着が待たれる。
 表紙装訂は豊田一男氏、カット狩野守氏をわすらわす予定。

月 日
 第四年度第一巻として刊行予定の文人・墨客の旅日記集
 「上州路をゆく」の執筆打合わせ。
 紀行文は数多くあるが日記体的ものは意外に少ない。会
 員の層も考えて比較的新しい文体で、味のあるものを主眼
 に選択することとなる。しかし余り最近のものとなると、
 著作権の関係もあり難しい所。
 タイトルも案数が出たが「上州路をゆく」に落ちついた

次回配本

次回第三年第四回版本は
 「故郷のうた」——わらべ唄、唱歌集——
 で二月上旬刊行・配本の予定です。

執筆は山田直次郎・都丸十九一・船津信章・谷内田盛一・
 の各氏・装訂は豊田一男が麗筆を振つて下さる予定です。
 又、第四年(昭和三十一年度)第一回には、

「上州路をゆく」——旅日記集——
 を五月下旬にお届けする予定です。郷土の地土州に遊
 んだ多くの文学者の日記を抜すし編さんするもので、この
 巻の編さん、校訂は萩原進・渋谷国忠・田島武夫の各先生
 が担当いたします。御期待下さい。
 既刊「群馬の古城趾」・「寄岩の山・妙義」・「近代群馬
 の人々」(2)と合わせて、計四冊にて今年度分は終了いたし
 ます。

事務局通信

会員の皆様、深みゆく秋の夜長をいかにお過ごしですか。
 ナイターも終わって読書に最適な季節、この好季に本年度の
 第二巻「妙義」、つづいて第三巻「近代群馬の人々」(2)
 をお送りすることが出来まして御同慶に存じます。どうぞ
 ご愛読下さいますようお願いいたします。
 さて会報第四号によせて事務局よりいくつかご連絡いた
 しますから何卒ご協力の程お願い申し上げます。

三十八年度会費の納入はつひて

いつも申し上げますように本会は会員制をとっておりま
 す。極端に申せば会費が集まらなければ本の発行も配本も
 不能におちいつてしまらうわけ。会報三号でもお願いい
 たしましたが、是共非会費の早期納入にご努力下さいます
 ようお願い申し上げます。尚本年度より会費納入促進の願
 いをこめて振替送金料を加入者負担といたしましたからせ
 いせご利用の上早期にご納入下さいますようお願い願
 いたします。

会員現在数 一九六〇名(三十八年十月十日現在)



みやま文庫

会 報

No. 4
 38. 10. 15

「群馬の古城趾」を読む

尾崎喜左雄

理屈ぬきで読んでしまった。とはして読んだのではない。
 一字一句読んだのである。実を言う途中でいやにな
 るのではないかと思つた。
 ジャーナリストの書いたものである。ただ手際よくまと
 めたものではないかと、内心バカにしかかつた。だが残
 念ながら読まされちやつた。
 いつたいどごがいいのか肝心のところで憎らしいほどす
 るりとぬけられる。はつと照つて正眼にかまえる、と飛えん
 (飛)の素早き欄干の上で扇子で招かれていた。時に
 風のごとく、時に林のごとく、いやいや時に山のごとくお

しかぶせてくるし、時に流れのごとくさ
 らざらと論じ去る。快刀乱麻というが、
 よくまあもみくちやな上州の戦国時代
 を、十一の古城跡の記述で切り抜けたも
 のだ。そこが魅力である。
 権謀術数の限りををつくした戦国乱世の
 各武将の動静など、細かい記録のない限
 りは全く寛えておられるものではない。
 戦国武将の上州での攻防を記録したもの

は、そのほとんどが江戸時代の述作である。古老に聞いた
 ところでその記憶には限度があるし、戦国時代をはかるに
 くだつたところのものである。記事は前後し、錯そうし、伝
 えた人の他の経験がはいり、編者の主観がまじる。英雄が
 生まれたら、ロマンが構成される。太平の世になると、と
 かく「夏草やつわものどもが夢の跡」となつて詠嘆久しう
 するものであり、荒城の月に涙を落とす

史家はもつと非人情なものだ。群馬の古城趾にはその非
 人情をちらつとのぞかせている。読むものの英雄心をあお
 つておきながら、急転直下、江戸の作者に責任をかわして
 いる。断定できないところをちやんと断定してあるが、歴
 史ではそう断定するよりほかに方法がないように結んでいる。
 地下に眠る故人をたたき起こして聞いても、上州一円
 の形勢が手にとるよりにわかるものではない。わかつたよ
 うな顔している人がいたら、それはわかつていない証拠で
 ある。非人情に切り得る人の言うことは聞く価値がある。

「群馬の古城跡」を読んで

水原 徳言

— 略 —

過日「群馬の古城跡」拝受致しましたところ

「高崎城」関係、下仁田戦争の簡処につき気付きましたことと有之どなた様の御執筆とも存ぜず申上ること及び難く一筆致します。

愚生祖父に当る者深井直一郎、当時二番手大砲方として従軍致しその父八之丞と申す者 三番手の将として出動、直一郎兄助太郎と申す者 第一番手御武者として従軍、今日記念碑のあるところにて切腹相果てました。なお、文中長坂忠恕(長恕は誤り)は又右衛門と称し小生祖母の父に当る者、また父は下仁田五十年祭に当り当時の軍装画記など作りしことも有之、父の祖父は水戸方利根川を渉る折に之を攻撃致して戦い戦傷致すなど

いろいろ関係深きもの有、かつて新聞に連載記事を投じたことと有 謄記の中重要なもの下記致しまして何かの御役に立てばと存じます。

○第一番手の将は会田孫之進

(金田は誤り、会田周幸は同一人物)

○堤克寛は隊長にあらず使番

「群馬の古城跡」に採録してあるのは、前橋、高崎、桐生、金山、館林、沼田、箕輪、藤、名胡桃、岩櫃、平井の十一城である。群馬の城がこれだけだというのではなく、これがそれらを代表しているという意味でもな。群馬には二百以上に及ぶ城跡があるそうだし、また白井、大胡、総社なども加えてほしい。白井城が見えないのが玉にキズである。しかし、そのキズも十一の城の内容でかなりおきなつてある。それにしてもせつかく憲政の木像と昌賢の木像とを比較してあるのだから、白井城にもぶれてもらいたかった。

さて終わりにこれを読まれる人は、一気に読むことだ。「おらが城」などとうっかりひいきを引き出すと、戦国乱世のうすの中にまき込まれてしまう。城を造つたり、刀を持ち出したりする時勢ではない。だからよけに悪臣に対して若い主君に同情する。頭の一つもたたきたくなる。そういう人にも一気に読まれることをおすすめする。それからわしの祖先は二君に仕えるようなものではないと信じている方にはぜひおすすめしたい。戦国時代は朱子学でかためた江戸時代とは違う。またそれを受け継いだ世代とも違う。江戸時代にできた書物は多かれ少なかれ武家への義理だてをしている。それをこの「群馬の古城跡」ではどこかですばつと切り捨てているのだ。読了後すつきりした気持ちになる。

ともかく、近來にない郷土史関係のよい読み物である。

(群馬大学教授)

(曼金之歴克寛、文久元年九月十三日より使番となる。

(使番)会田孫之進の役名(小頭武者)の副官のような役目(現在記念碑のあるところ道路前にて名主土蔵の前に腰かけていたところ崖の上よりねらわれて討死した)

○梅の木峠は誤り梅沢峠

○水戸方の被害教名とは誤り、全員後に刑死したので氏名の分明でない者が多いが

下仁田村に宿りし者九百二十五人、

信州平賀村に宿つた時に八百四十五人、

その間八十名の差があるのでこれが被害者の数であること明らか、但し、下仁田の激戦で水戸方は逃亡者を出したので八十名が死人だとは思われない。

戦いの翌日も、その翌日も泊り先で農家を焼、或は、馬草三百束、薪六駄、炭三十五俵、杉角六本、貫刺六駄、を徴収して死傷者を焼棄している。

武田正生自身も自分の小姓を下仁田で重傷で助け難いと考へて切つている。

三番手は参戦する前に戦いは終つた。高崎勢が退いたのは確かであるが、被害は水戸方に大きかつた。水戸方は九百二十五人の兵、高崎方は、二百一人の戦いであるから、はじめから勝算はない。けれども「まげである」とはいえないと思ふ。

田沼善義頭より命を受け(元治元年十一月十二日、六月十一日は誤り)て兵を出した。伊勢崎三百、前橋藩八百、我等は全く戦意がなかつたようで、ひとり高崎藩のみ戦つたものである。

○猿田忠雄は田中源蔵の拳兵に参加した者であつて、藤田

田丸、武田の軍とは直接の関係はない別派行動の者である。

○その他略

以上御わび乍ら敬陳

(本文は編集部へ寄せられた水原氏の書簡より原文のまま引用させて頂きました。)

(建築工芸家)

編集日記

月 日

企画会議。本年第四巻のテーマを討議。各委員より持ち寄られた案は

- 1 住谷天来師の戦時中の日記
- 2 鬼城歳時記
- 3 群馬歌壇史(戦前迄)
- 4 上毛紀行文集
- 5 わらべ唄と民謡
- 6 上州やくざ覚書
- 7 郷土人書簡集
- 8 県内十大ニエースの十年集
- 9 上州路の漚祖神
- 10 上州の宿場今昔
- 11 旅日記にみた群馬

等々(いずれも仮題)

結局A案として

「故郷のうた」―わらべ唄・唱歌を集めて―

B案「上州路を行く」―旅の日記集―

の二案を併行して進める事にきまる。